現代日本の建築家の設計論における都市環境認識

建築設計論における社会的枠組みに関する研究 (3)

THOUGHTS ON URBAN ENVIRONMENT IN DESIGN THEORIES

BY CONTEMPORARY JAPANESE ARCHITECTS

A study on social aspects in design theories by contemporary Japanese architects (3)

谷川大輔*, 加藤拓郎**, 奥山信一***

Daisuke TANIKAWA, Takuro KATO and Shin-ichi OKUYAMA

The aim of this report is to illustrate the thoughts on urban environment in design theories by contemporary Japanese architects. At first, some comments on the thoughts on urban environment and the relationship-method between buildings and urban environment were extracted from each theory. Secondly, the meanings of those comments was analyzed through the KJ method originated by Kawakita Jiro. Next we connected thoughts on urban environment with the range that architects recognized the urban environment and the relationship-method between buildings and urban environment. Then it was found some definite meanings. Finally we made it clear how contemporary Japanese architects recognized the urban environment.

Keywords : *thoughts on urban environment, contemporary Japanese architects, design theories, KJ method*

都市環境認識、現代日本の建築家、建築設計論、KJ 法

1. 序

1.1. 本論の目的

都市は、数多くの人間が高密度に居住し、政治・経済・文化活動などが活発に行われ社会的な共同体が形成される場である。このような都市環境において建物を設計する設計者は、社会生活に関する様々な事柄に配慮しながら設計を行っていると考えられる。特に規模が大きいものや、機能が公共的役割を担うものなど、市民の生活に直接影響を与える建物に対する市民の社会的関心は高く¹⁾、そのような建物の設計者は、都市環境に対する明快な認識をもって具体的な建築を設計することを求められるといえる。したがって、都市において建物を設計する設計者は、都市環境における建築のあり方についての考えを具体化することで、いかなる水準で社会との接点をもちうる空間とするかという社会的枠組みに関する思考が求められていると考えられる。また、このような都市環境における建築家²⁾の思考は、建築を自律的な側面から捉えるのではなく、外部環境との相対的な視点から位置づける見方のひとつとして捉えることができ、建築を社会的に価値あるものとする上で重要な内容を含んでいると考えられる。しかし現代の建築家が具体的な設計活動に際して、都市環境をどのように認識しているかという思考の総体は曖昧であるといえる。

そこで本研究では、現代日本の建築家の設計論³⁾における都市環境に関する認識とその具体化の方法を検討することで、建築設計論における社会的枠組みに関する建築家の思考の一端を明らかにすることを目的とする。

1.2. 既往の研究

これまで都市環境における認識を対象とした既往の学術的な研究には、都市環境のイメージ構造に深く関与している建物とその周辺の街並との知覚的關係を物的連続性から考察したもの⁴⁾や、建物の外壁面に現れる物理量もしくは物理的構成とその心理的評価の關係を明らかにすることを目的として、環境心理学的な視点から考察したもの⁵⁾などがある。また、近・現代における我が国の建築家の言説に関する論文では、例えば、大正期から昭和中期における建築家の言説を分類し統計的に考察することで、建築言語の変遷や關係性を分析し建築思潮の大筋を捉えたもの⁶⁾などがある。また筆者らは既報の論文において、商業建築の設計論からその外形表現の主題と具体化の方法を検討・考察することで、建築と周辺環境との接点に関する建築家の思考の一端を示している⁷⁾。これらの論文に対し本研究では、建築家の設計論を資料とし、建築家が都市環境をいかに認識し具体的な設計に反映しているかを分析することで、建築の社会化に関する建築家の思考の一端を明らかにするものである。

* 東京理科大学工学部建築学科 助教・博士(工学)

** 森ビル㈱ 修士(工学)

*** 東京工業大学大学院総合理工学研究科
准教授・博士(工学)

Assistant Prof., Department of Architecture, Faculty of Engineering, Tokyo University of Science, Dr. Eng.

MORI BUILDING, M. Eng.

Assoc. Prof., Department of Built Environment, T. I. Tech., Dr. Eng.

1.3. 本研究の概要

まず、資料とした現代日本の建築家による都市環境との関わりを主題とした設計論を通読し、それらの内容を相互に比較検討することで、建築家の都市環境に関する認識として明確に読み取れる箇所（以下、都市環境認識）を抽出する。例えば表1の分析例NO.3「…倉敷市は天領であったところからの伝統をうけついで美しい街である。…」は、建物の設計の主題として建物が建てられる周辺環境について述べている部分として明確に読み取ることができるため、建築家の都市環境認識として抽出することができる。さらに論文を読み込むことで、建築家がこの都市環境認識を具体的な建築設計とどのように関係づけているかといった記述（以下、関係手法）を抽出する。例えば上述の分析例では「…私たちは、この計画の上になつて、さらにこの矩形の建物の位置と軸線を実際の土地に定めるのに慎重を期した。この軸は倉敷の都市が生まれかわっていくよりどころとなるからである。…」は、街づくりの重要な軸（街路）に対して建物を慎重に配置するといった建築の具体化によって都市環境の発展に貢献しようと試みる記述として読み取れるため関係手法として抽出することができる。このように抽出した建築家の都市環境認識と関係手法の意味内容をそれぞれ相互に比較検討する⁸⁾ことで分類整理し、さらにそれらの対応関係を考察することで、建築家の都市環境に対する認識が建築設計においてどのように具体化されているかを明らかにする。

2. 建築家の設計論における都市環境認識の意味内容と特性

2.1. 建築家の都市環境認識の意味内容

上記のような方法によって抽出された建築家の都市環境に関する認識の意味内容を相互に比較検討⁸⁾することで、いくつかの水準における意味のまとまりとして位置づけることができた。それらを示したのが図1である。これより具体的な建築設計に際する建築家の都市環境認識は、建物あるいは周辺環境を構成する実体要素を主題とした内容『物理的環境』⁹⁾と、都市環境で生じる出来事や人々の活動を主題とした内容『現象的環境』で大枠捉えることができた。このうち『物理的環境』は、建築物や土木構築物などの都市環境を構成する構築的要素群との関係、あるいはそれらの集合状態を論

じる『構築物群の構成』⁹⁾と、都市の景観や情景を描く『都市風景の描写』とで捉えることができる。『構築物群の構成』は、建物群のランダムな集合体を捉えるもの(60)¹⁰⁾、都市環境は常に変化し続け乱雑であるとするもの(115)など都市環境の{複雑性}⁹⁾に着目するものと、無個性な表層によって構成される建物群としての都市環境を認識するもの(15)、同等なスケールの建物で構成された単調で等質な都市環境を捉えるもの(32)など都市環境の{均質性}に着目するものといった対照的な内容が含まれる。また、建物の密度が街の質にとって支配的である(112)、都市環境はぎっしりとつまった密実な連続体である(114)、都市は虫食い状の空間である(37-3)などのように建物群の{密度}に着目した内容もある。『都市風景の描写』は、都市には特有のリズムがあるとして都市環境独特の躍動感について語るもの(19-6)¹⁰⁾、反対に都市環境を包む沈滞した空気感を捉えるもの(8)などのように都市環境の{雰囲気}を捉えるものと、また商業ビルのファードや看板が集合する状態に着目し消費的で無秩序な都市風景について語るもの(74)、保存・再生が必要な伝統的街並みについて語るもの(88-2)などのように都市環境における{景観}について語るものとがある。

これらに対して『現象的環境』は、都市における人々の生活感やコミュニケーションなどを捉える『生活習慣への適応』、都市環境に内在する社会現象や社会問題などに着目した『社会意識との応答』、都市計画制度のように都市環境の骨格を決定する要因に着目した『構成システムの再考』、建築をつくる上でのコンテキストなど都市環境のもつ潜在的な活力に着目した『潜在活力の顕在化』といった内容で捉えることができる。このうち『生活習慣への適応』は、空間的および時間的に分割できない流動的で多様な現代の都市生活について論ずるもの(14-1)¹⁰⁾、都市環境は日常的な行為の断片的イメージの集積によってつくられ、それが現代の文脈となりうるとするもの(19-1)など、都市生活者の{ライフスタイル}を捉えるものと、人間の記憶を媒介とした伝承作用こそ環境を人間に引き寄せることができる有効な手段だと考えるもの(65-2)、都市生活者の抱く故郷性と異郷性の混在が都市に刺激を与えるとするもの(78-1)のように{人間の記憶}の中にあるものとしての都市環境を認識するものがある。『社会意識との応答』は、同心円状に広がる現代都市空間の機能分離を批判的に捉えるもの

表1 分析例

<p>NO.3『建築・都市について』丹下健三</p> <p>…倉敷市は天領であったところからの伝統をうけついで美しい街である。…しかし倉敷市は水島臨海工業地域をふくんで、今後ますます発展していくであろう。…倉敷のような規模の都市では、市庁舎の建設ということは、この町の将来のシステムを決定するほどのウェイトをもっている。それは短期的なサイクルで変化していくものではなく、長期のサイクルで、一時代を規定するほどのものとなるだろう。そういう意味では、この秩序に従うべきではなく、これから創っていくべき秩序の一つの出発点となるべきである。(→都市環境認識)</p> <p>…私たちは、この計画の上になつて、さらにこの矩形の建物の位置と軸線を実際の土地に定めるのに慎重を期した。この軸は倉敷の都市が生まれかわっていくよりどころとなるからである。…都市・建築におけるスケールの問題を考えていた。この市庁舎は、…マス・ヒューマン・スケールをもつものでありたいと考えていた。そして、なにがこのマス・スケールをあらわすべきかについて、私は、ストラテジーであると考えていたのである。…スケールのsequence序列づけによって、広場－市庁舎－内部空間のオーガニゼーションを、さらに市庁舎－広場－民家にいたる都市空間のhierarchyを考えてみたかったのである。…(→関係手法)</p>	<p>●都市環境認識→『現象的環境』 『構成システムの再考』 {ネットワーク性}</p> <p>○特性性→[限定]</p> <p>■関係手法→『設計対象』 (現状肯定)</p>
<p>NO.66-1『消費の海に浸らずして新しい建築はない』伊東豊雄</p> <p>…この数年間にこの都市空間は空虚な記号で充満してしまった。美しく輝いていた空白の一点は今や無数の空虚な記号の集積の間に埋め尽くされている。そして虚構をわがシステムで充填しようとするればするほど空虚さはいつそう増幅され、わがシステムは次なるわがシステムを待望し、システムはさらなるシステムを喚起するという巧みな資本の操縦促進システムがフル稼働するのである。しかし、表層のフォルマリズムの蔓延－空虚な記号の堆積場－わがシステム待望と結ばれていく、このエッセー的な都市空間のなかで、われわれは「マド」してひたすら空虚な記号と戯れ、建築的試みとしての記号の再生産に励む以外術はないのであろうか。それではあまりに虚しいではないか。…(→都市環境認識)</p> <p>…私は建築の概念を問おうとするときにフォルマリスト的な操作ではなく、まず新しい都市生活のリアリティを発見することから始めたいと考えている。…ともかく生活のイメージを既存の建築空間に詰め込むことだ。そして、閉塞してしまっている建築空間のあちこちに風穴を開けること、そしてそこに新しい都市の風を、空気を、光を入れてやることだ。…このずらす作業を繰り返しているうちに、きっと新しい都市生活のリアリティにふさわしい新しい建築が生まれてくるに違いない…(→関係手法)</p>	<p>●都市環境認識→『物理的環境』 『構築物群の構成』 {複雑性}</p> <p>○特性性→[無限定]</p> <p>■関係手法→『思考対象』 (取込)</p>

図1 建築家の都市環境認識の意味内容

(26-1)¹⁰⁾ や、都市環境は急速に文明進化が進む情報化社会になると予見するもの (82-2) のように都市環境の {時代精神} に着目するものと、現代都市の爆発的な人口増加を捉えるもの (100-2)、都市の深刻な住宅難を論ずるもの (12-1) などのように都市環境の {社会問題} に着目するもので捉えることができる。また『構成システムの再考』は、インフラによって秩序づけられた近代主義的な街区構成に着目するもの (26-3)¹⁰⁾、E・ワトの田園都市論に影響された20世紀以降の画一化した近代都市計画を批判的に捉えるもの (37-2) など {都市計画制度} に着目するものと、都市環境は全体性と完結性を同時にもつ有機体であると捉えるもの (3)、都市環境の魅力は建物と建物あるいは建物と道の密接な関係にあるとするもの (77-2) のように都市環境の {ネットワーク性} に着目するもので捉えることができる。さらに『潜在活力の顕在化』は、都市環境は常に新しい何かを生み出しているゆらぎのある空間であるべきだとするもの (105)¹⁰⁾ などのように都市環境の潜在的な活力の可能性を論じるものであり、他の意味内容と同時に述べられることが多い。

また基本的には『現象的環境』の内容ではあるが『物理的環境』の内容を含むものとして、都市環境と対比的な存在である自然環境との関係に着目した『自然環境との相関』と、都市環境に内在する風土性、歴史性などに着目した『文化的文脈への眼差』を捉えることができる。このうち『自然環境との相関』は、都市環境と自然環境には差異がないとするもの (64-2)¹⁰⁾、都市環境と自然環境という二元論は意味を失いつつあると認識するもの (43) など都市環境と自然環境とを同じ視点で扱い論ずるもの ({同列}) と、都市環境は

自然環境を破壊する一因であるとするもの (33)、美しい自然環境にはそれを際立たせる都市環境が必要だと捉えるもの (22-1) など、都市と自然とを対立した存在として認識するもの ({対立})、さらに自然的要素を記号化し再配列したものが都市環境であるとするもの (55)、都市環境は共生すべき自然系の様相によって記述され読み取りうるもの (63-2) のように自然環境の延長上にあるものとして都市環境を捉えるもの ({変容}) といった3つの枠組で捉えることができる。

2.2 都市環境認識の内容から読みとれる特性

前節で捉えた建築家の都市環境認識の内容には、地域・地区の名称などを具体的に明示することで、建物が建つ場所を特定して語るもの ([限定]) と、特定せず抽象的な都市環境を語るもの ([無限定]) があることがわかる。例えば表1の分析例N0.3の都市環境認識「…倉敷市は天領であったところからの伝統をうけついで美しい街である。…」は、倉敷といった地名を具体的にあげその土地柄について述べているため [限定] として捉えることができる。これに対し表1の分析例N0.66-1の都市環境認識「…この数年間にこの都市空間は空虚な記号で充満してしまった。…」は、具体的な地名を用いずに都市環境に関する抽象的な水準での認識を述べているため [無限定] として捉えることができる。

このような視点を建築家の都市環境認識の特性とし、すべての資料について検討した上で前節で導いた意味内容の大枠との対応を示したのが表2である。この表から、『現象的環境』として語られるものは [限定] と [無限定] がほぼ同数であるのに対し、『物

『物理的環境』は約7割が〔限定〕として語られていることがわかる。このことは、建物の密度やスケールといった都市環境を構成する実体要素は、抽象的な創作概念と捉えることは少なく、建物が建てられる場所毎に固有性を与える存在として建築家は認識する傾向があることを示しているといえる。

3. 建築家の都市環境認識に対する関係手法

前章では、建築家の都市環境認識の内容を検討したが、そうした内容をどのように設計に反映させているかといった記述も同時に読み取ることができる。「1.3. 本研究の概要」で示したようにそれらを建築家の都市環境認識に対する関係手法として抽出し、その内容を検討した⁸⁾。その結果、自らが設計する建物とともに都市環境をも創造することを意図するもの（以下、《設計対象》⁹⁾）と、あくまで思考上の対象として都市環境を捉えているもの（以下、《思考対象》）の二つの大枠で捉えることができた。例えば表3、N0.78-1「…あえて建築家の立場から提案するとすれば、これからの都市デザインは究極的には現代を鏡とした豊かな風景の創造に向かうべきであり、その集積が都市の実態、クオリティを決定していくと考える。…」は、建築を建てることで豊かな都市環境の創造に向かうことを意図していると読みとれることから《設計対象》と捉えることができる。これに対して表3、N0.62「…様相は、全体性を指し示す概念であるから、直感的把握はできても、簡単には表現できない。様相そのものを説明することは不可能であっても、建築の組み立てを説明することはできない。様相そのものを説明することは不可能であっても、建築の組み立てを説明することはできる。空間を形成するものや環境的な要素のあり方を説明するための新しい言葉が豊富になるにしたがって、様相なる概念も明らかになるだろう。だが、それ以前に、私たちは人びとに呼びかけ、自らの特性を浮かび上がらせるような建築、いつてみれば、Corresponsive Architecture（「応答せよ」の建築）の数々を語りあげねばならない。」→《思考対象》（一体化）

さらに上記のように抽出した《設計対象》と《思考対象》の内容を、それぞれについてどのように具体的な設計に反映させようとしているかといった視点からさらに読み込み細分類した。《設計対象》は、建築家が建物および都市環境を設計する前提条件として、現状の都市環境の評価の是非に関する内容を読み取ることができ、現状を肯定的に捉えるもの（〈現状肯定》⁹⁾）と、現状を否定的に捉えるもの（〈現状否定》）に分類できる。これに対して《思考対象》では、都市環境をどのような観点から思考し建築設計に反映させるかといった建築家の視点を読み取ることができる。それは、都市環境を観察した上で建築に都市環境の特性を内包しようとするもの（〈取込》⁹⁾）、これとは反対に建築から都市環境に対して何らかの情報を発信したり領域の浸透をはかるもの（〈拡張》）、また都市環境と建築との相互作用を思考し都市環境と建築の融合をはかるもの（〈一体化》）、さらに建築と都市環境は不連続なものとして関係を絶つもの（〈断絶》）の4つに分類することができた。

それら関係手法の内容を該当する資料数と共に示したものが表4である。表4から関係手法は、《思考対象》に関する内容の方が多いが、《設計対象》もその半数近くあることが分かる。このことから現代の我が国のように成熟した都市環境においても、新たな都市建設の手法が現代の日本の都市建築あるいは都市環境の創作にも影響を与えて続けていることをうかがうことができる。

表2 環境認識の特性

認識内容	特性	限定		無限定	
		限定	無限定	限定	無限定
物理的環境		71	30		
現象的環境		62	70		
合計		133	100		

表3 関係手法の抽出例

N0.78-1 横文彦 『時と風景－東京へのオマージュ』 「…都市には異なった秩序が現れつつあるように見える。さらに情報の発達、環境の変化は人々に記憶の装置としての〈故郷〉あるいは〈故郷性〉と、幻想・欲望の対象としての〈異郷〉ないしは〈異郷性〉を人々が同時に都市に求めるようになった。（中略）あえて建築家の立場から提案するとすれば、これからの都市デザインは究極的には現代を鏡とした豊かな風景の創造に向かうべきであり、その集積が都市の実態、クオリティを決定していくと考える。…」	
→《設計対象》 〈現状肯定〉	
No.62 原広司『Corresponsive Architectureの条件』	
「…情景図式のもとで現象してくる風景の全体が、今日の都市の様相だと云える。…様相は、全体性を指し示す概念であるから、直感的把握はできても、簡単には表現できない。様相そのものを説明することは不可能であっても、建築の組み立てを説明することはできる。空間を形成するものや環境的な要素のあり方を説明するための新しい言葉が豊富になるにしたがって、様相なる概念も明らかになるだろう。だが、それ以前に、私たちは人びとに呼びかけ、自らの特性を浮かび上がらせるような建築、いつてみれば、Corresponsive Architecture（「応答せよ」の建築）の数々を語りあげねばならない。」	
→《思考対象》 〈一体化〉	

表4 関係手法の内容

《設計対象》 (72)	
現状肯定	41
現状否定	31
《思考対象》 (161)	
取込	65
一体化	32
拡張	35
断絶	29

表5 論説毎の都市環境認識と関係手法

年	NO.	環境認識				関係手法		論文名	著者
		内容	限定	無限定	設計	思考対象	断絶		
55	1	現代日本において近代建築をいかに理解するか	■	□	□	□	□	現代日本において近代建築をいかに理解するか	丹下健三
60	2	「都市」の社会的空間	■	□	□	□	□	「都市」の社会的空間	大谷幸夫他
61	3	都市・建築について	■	□	□	□	□	都市・建築について	丹下健三
63	4	現代建築をつくるために	■	□	□	□	□	現代建築をつくるために	菊竹清訓
68	5	道徳への挑戦	■	□	□	□	□	道徳への挑戦	大高正弘
70	6	設計対	■	□	□	□	□	設計対	宮脇禮
71	7	回想としての広場考	■	□	□	□	□	回想としての広場考	横文彦
72	8	街かどの独白	■	□	□	□	□	街かどの独白	谷口吉郎
73	9	「わが」を、なぜ	■	□	□	□	□	「わが」を、なぜ	林昌二
74	10	建築とその外界について	■	□	□	□	□	建築とその外界について	原広司
75	11	まち空間と町並み	■	□	□	□	□	まち空間と町並み	横文彦
76	12	歩合型都市と空間機械	■	□	□	□	□	歩合型都市と空間機械	菊竹清訓
77	13	現成の手法	■	□	□	□	□	現成の手法	山下和正
78	14	ふたたび町並みについて	■	□	□	□	□	ふたたび町並みについて	横文彦
79	15	都市の顔	■	□	□	□	□	都市の顔	土岐新
80	16	遠くからみた「代官山集合住居計画」	■	□	□	□	□	遠くからみた「代官山集合住居計画」	横文彦
81	17	都市への埋め込み作業	■	□	□	□	□	都市への埋め込み作業	長谷川逸子
82	18	文脈をもとめて	■	□	□	□	□	文脈をもとめて	伊東豊雄
83	19	都市におけるふたつの低層の集合住居	■	□	□	□	□	都市におけるふたつの低層の集合住居	清田育男
84	20	〈俗〉なる世界に投影される〈聖〉	■	□	□	□	□	〈俗〉なる世界に投影される〈聖〉	伊東豊雄
85	21	設計ノート	■	□	□	□	□	設計ノート	谷口吉生
86	22	続環境に対するリアクション	■	□	□	□	□	続環境に対するリアクション	廣瀬豪
87	23	都市・外層・場	■	□	□	□	□	都市・外層・場	小野正弘
88	24	都市の事実	■	□	□	□	□	都市の事実	富永謙
89	25	中間領域または曖昧性の具体化	■	□	□	□	□	中間領域または曖昧性の具体化	黒川紀章
90	26	北野町の4つの仕事を通して	■	□	□	□	□	北野町の4つの仕事を通して	安藤忠雄
91	27	家具は都市	■	□	□	□	□	家具は都市	象設計集団
92	28	置き忘れたモノたちへ	■	□	□	□	□	置き忘れたモノたちへ	石山修武
93	29	形態の消滅	■	□	□	□	□	形態の消滅	伊東豊雄
94	30	街路の立体的拡張	■	□	□	□	□	街路の立体的拡張	安藤忠雄
95	31	なぜ、吹き抜けか	■	□	□	□	□	なぜ、吹き抜けか	小倉善明
96	32	住宅の長屋から九条の町家へ	■	□	□	□	□	住宅の長屋から九条の町家へ	安藤忠雄
97	33	地域の風景となる建築をつくる	■	□	□	□	□	地域の風景となる建築をつくる	高田光太郎
98	34	建築化された空白	■	□	□	□	□	建築化された空白	安藤忠雄
99	35	個の集積から	■	□	□	□	□	個の集積から	林寛治
100	36	都市、国家、そして「様式」を問う	■	□	□	□	□	都市、国家、そして「様式」を問う	磯崎新
101	37	建築の実体・イデオロギ	■	□	□	□	□	建築の実体・イデオロギ	石山修武
102	38	街のイデオロギ	■	□	□	□	□	街のイデオロギ	石井修
103	39	「パ・ヴァージ」試論	■	□	□	□	□	「パ・ヴァージ」試論	小宮山昭
104	40	魔界の建築で都市を撃つ	■	□	□	□	□	魔界の建築で都市を撃つ	毛綱敏
105	41	歴史と現代の共生	■	□	□	□	□	歴史と現代の共生	黒川紀章
106	42	もうひとつの都市	■	□	□	□	□	もうひとつの都市	横文彦
107	43	現代都市の「リミテッド」ハット	■	□	□	□	□	現代都市の「リミテッド」ハット	伊東豊雄
108	44	都市型寺院考	■	□	□	□	□	都市型寺院考	高口恭行
109	45	室内外の多様な関係の要求が、	■	□	□	□	□	室内外の多様な関係の要求が、	石井和雄
110	46	都市という地形	■	□	□	□	□	都市という地形	山本理顕
111	47	建築における場所と主体の関係をめざして	■	□	□	□	□	建築における場所と主体の関係をめざして	重村力
112	48	スチライノに託したこと	■	□	□	□	□	スチライノに託したこと	大谷幸夫
113	49	建築・機械・都市	■	□	□	□	□	建築・機械・都市	高松伸
114	50	〈断片〉あるいは〈断片〉としての都市	■	□	□	□	□	〈断片〉あるいは〈断片〉としての都市	原広司
115	51	境を越えて	■	□	□	□	□	境を越えて	安藤忠雄
116	52	私の都市型住宅	■	□	□	□	□	私の都市型住宅	香山壽夫
117	53	風景を切り取る	■	□	□	□	□	風景を切り取る	山本理顕
118	54	森の輪転	■	□	□	□	□	森の輪転	原広司
119	55	共生の建築へ	■	□	□	□	□	共生の建築へ	黒川紀章
120	56	都市機械	■	□	□	□	□	都市機械	篠原一男
121	57	建築に〈おもい〉を込める	■	□	□	□	□	建築に〈おもい〉を込める	安藤忠雄
122	58	まちをついでくるんだ商業空間	■	□	□	□	□	まちをついでくるんだ商業空間	石井和雄
123	59	明確な「対立」と「対立」	■	□	□	□	□	明確な「対立」と「対立」	篠原一男
124	60	建築「ゆらぎ」モジュール	■	□	□	□	□	建築「ゆらぎ」モジュール	相田武文
125	61	Corresponsive Architectureの条件	■	□	□	□	□	Corresponsive Architectureの条件	原広司
126	62	〈第二の自然〉としての建築	■	□	□	□	□	〈第二の自然〉としての建築	長谷川逸子
127	63	宇宙模型としての都市住宅	■	□	□	□	□	宇宙模型としての都市住宅	松永安光
128	64	住宅の文脈	■	□	□	□	□	住宅の文脈	富永謙
129	65	消費の海に漂う新しい建築はな	■	□	□	□	□	消費の海に漂う新しい建築はな	伊東豊雄
130	66	「外側」との関係を求める	■	□	□	□	□	「外側」との関係を求める	早川邦彦
131	67	シムルの「アトミック」	■	□	□	□	□	シムルの「アトミック」	富永謙
132	68	増設策論	■	□	□	□	□	増設策論	入江綾一
133	69	「都市」に住まう	■	□	□	□	□	「都市」に住まう	丹下健三
134	70	建築の長寿を寄せる時代	■	□	□	□	□	建築の長寿を寄せる時代	早川邦彦
135	71	場の持つ磁気を増幅する	■	□	□	□	□	場の持つ磁気を増幅する	早川邦彦
136	72	間の空間	■	□	□	□	□	間の空間	毛綱敏
137	73	私にとっての公共建築	■	□	□	□	□	私にとっての公共建築	伊東豊雄
138	74	映像的建築の試み	■	□	□	□	□	映像的建築の試み	伊東豊雄
139	75	「藝術と罪悪」再考	■	□	□	□	□	「藝術と罪悪」再考	隈研吾
140	76	都市型集合住宅	■	□	□	□	□	都市型集合住宅	大野秀孝
141	77	時と風景－東京へのオマージュ	■	□	□	□	□	時と風景－東京へのオマージュ	横文彦
142	78	住まいの光景・風景、そして	■	□	□	□	□	住まいの光景・風景、そして	黒川吉郎
143	79	都市型小規模モデルの可能性	■	□	□	□	□	都市型小規模モデルの可能性	伊東豊雄
144	80	包まれる建築を超えて	■	□	□	□	□	包まれる建築を超えて	伊東豊雄
145	81	都市の新しい姿を求めて	■	□	□	□	□	都市の新しい姿を求めて	菊竹清訓
146	82	都市の「バグ」	■	□	□	□	□	都市の「バグ」	山本理顕
147	83	空中都市へ	■	□	□	□	□	空中都市へ	原広司
148	84	歌賓街「アトミック」について	■	□	□	□	□	歌賓街「アトミック」について	R.ロジャース
149	85	「アトミック」を建築する	■	□	□	□	□	「アトミック」を建築する	渡辺真理
150	86	素材、都市、リリィ	■	□	□	□	□	素材、都市、リリィ	大江匡
151	87	建築の「メセジ」性	■	□	□	□	□	建築の「メセジ」性	黒川哲雄他
152	88	建築の構想をめぐって	■	□	□	□	□	建築の構想をめぐって	山本理
153	89	都市の単位として	■	□	□	□	□	都市の単位として	元倉真琴
154	90	招き込まれた「外部」	■	□	□	□	□	招き込まれた「外部」	大野秀孝
155	91	関係性をデザインする	■	□	□	□	□	関係性をデザインする	坂本一成他
156	92	風景の中に人を迎え入れる	■	□	□	□	□	風景の中に人を迎え入れる	古谷誠章
157	93	都市の単位	■	□	□	□	□	都市の単位	山本理顕
158	94	多様性のなかの建築	■	□	□	□	□	多様性のなかの建築	ワグネル・ペ
159	95	点を攻めて都市を撃つ	■	□	□	□	□	点を攻めて都市を撃つ	堀池秀人
160	96	M1、8街区の都市デザイン方針	■	□	□	□	□	M1、8街区の都市デザイン方針	小沢明
161	97	都市の「プロト」	■	□	□	□	□	都市の「プロト」	大江匡
162	98	均質性の破壊から	■	□	□	□	□	均質性の破壊から	石山修武
163	99	ビッド・ロケットと建築家	■	□	□	□	□	ビッド・ロケットと建築家	原広司
164	100	都市と交差する「ユートピア」	■	□	□	□	□	都市と交差する「ユートピア」	村田晴夫
165	101	建築と少年	■	□	□	□	□	建築と少年	石山修武
166	102	建築の都市化	■	□	□	□	□	建築の都市化	原広司
167	103	多岐質な水	■	□	□	□	□	多岐質な水	北川原温
168	104	浮遊する「パブリック・スペース」	■	□	□	□	□	浮遊する「パブリック・スペース」	長谷川逸子
169	105	脱「対話」の建築とその手法	■	□	□	□	□	脱「対話」の建築とその手法	フジタ・タツ
170	106	映像性について	■	□	□	□	□	映像性について	青木淳
171	107	境界思想の変換を	■	□	□	□	□	境界思想の変換を	伊東豊雄
172	108	空気を呼吸する	■	□	□	□	□	空気を呼吸する	小嶋一秀他
173	109	水/ドミノ/関係性	■	□	□	□	□	水/ドミノ/関係性	黒川紀章
174	110	都市に対して何が可能か	■	□	□	□	□	都市に対して何が可能か	隈研吾
175	111	空間・行為・身体	■	□	□	□	□	空間・行為・身体	千葉学
176	112	不均質な抽象性	■	□	□	□	□	不均質な抽象性	伊東豊雄
177	113	都市に孔をうがつ	■	□	□	□	□	都市に孔をうがつ	隈研吾
178	114	都市に立つ形なき外形・・・	■	□	□	□	□	都市に立つ形なき外形・・・	坂本一成
179	115	都市現象、生活現象、・・・	■	□	□	□	□	都市現象、生活現象、・・・	坂本理顕他
180	116		■	□	□	□	□

図2 建築家の都市環境認識と関係手法の対応

4. 建築家の都市環境認識と関係手法の対応

前2章をふまえて、建築家が都市環境をどのように認識したかといった意味内容と、そうした内容が具体的な場所と共に語られているかといった記述（都市環境認識の特定性）とを、都市環境認識をどのように建築設計に反映させているかといった関係手法ごとにそれらの対応を示したのが図2である。その結果、まず自身が設計する建物とともに都市環境も創造していこうとする《設計対象》で、現状を肯定的に捉える場合（〈現状肯定〉）には、建物が建てられる具体的な地名等を明示して（〔限定〕）地勢や街並、歴史的建造物といった物的要素（『物理的環境』）について語ることが多いのに対し、現状を否定的に捉える場合（〈現状否定〉）は、具体的な場所を明示せず（〔無限定〕）アクティビティやコミュニティといった人間の活動や状況（『現象的環境』）について述べるものが多い、といった対照的な傾向を読みとることができる。このことは、建築家が都市環境の創造を試みる場合には、建物が建てられる場所の固有性を都市の景観的側面とともに高く評価して市民とアイデンティティを共有しようとするものと、既存の都市環境を改善するために建築家自身の描く理想的な状況を提示することで新たなアクティビティの誘発やコミュニティの形成を図るもの、といった対照的な内容によって建築を社会化する傾向にあることを示している。

一方、自身の設計において思考上の観察対象として都市環境を捉える《思考対象》は、〈取込〉と〈拡張〉において顕著な傾向がみられる。このうち都市環境を観察した上で建築に都市環境の特性を内包しようとするもの（〈取込〉）は、具体的な場所を明示せず（〔無限定〕）都市環境における出来事や人々の活動といった都市環境における諸現象（『現象的環境』）と共に語るものが多いのに対し、建築から都市環境に対して何らかの情報を発信したり領域を浸透させるもの（〈拡張〉）は、建物が建てられる具体的な地名等を明示して（〔限定〕）建物あるいは周辺環境を構成する実体的要素（『物理的環境』）と共に語られるものが多いといった傾向を読みとることができる。このことは、都市環境から建築といった建築に向かう受動的なベクトルを思考する場合は、都市環境における人間の活動に関する諸現象を普遍化して認識することが多く、これとは対照的に建築から都市環境へ向かう能動的なベクトルを

思考する場合は、都市環境における既存の実体的要素を建物が建てられる場所の固有性と共に捉える傾向にあることを示している。

また、〈一体化〉と〈断絶〉においても傾向がみられる。このうち都市環境と建築との相互作用を思考し都市環境と建築の融合をはかるもの（〈一体化〉）は、建物が建てられる具体的な地名等を明示するもの（〔限定〕）と共に語られることが多く、また建築と都市環境は不連続なものとして関係を絶つもの（〈断絶〉）は、アクティビティやコミュニティといった人間の活動や状況（『現象的環境』）とともに語られる傾向があることがわかる。

5. 結

以上、建築家の都市環境との対応を主題とした設計論において、建築家の都市環境認識の意味内容と特定性、さらに都市環境に対する関係手法を抽出しその内容を検討した。まず、建築家の都市環境認識の意味内容を、都市環境の物理的側面及び現象的側面に着目する枠組で捉え、それぞれ内容を詳述した。次に建築家の都市環境認識が場所を限定するか否かを特定性として捉え、建築家の都市環境認識の内容との対応関係を考察して、建築家は都市環境を構成する実体的要素を、抽象的な創作概念と捉えることは少なく、建物が建てられる土地柄と共に認識する傾向を示した。さらに、都市環境に関する認識を建築家は建築設計にどのように反映させているか、といった部分を建築家の都市環境に対する関係手法として抽出し分類して、自身が設計する建物によって都市環境をも創造していこうとするものと、自身の設計において思考上の対象物として都市環境を捉えるものの二つの枠組で捉え、さらにそれぞれについて細分類した。

最後に、建築家の都市環境認識の意味内容とその特定性とを、関係手法毎に対応を検討した。その結果、建築家が都市環境の創造的思考を試みる場合、現状の都市環境の是非に関する評価の違いにより、都市環境に関する対照的な認識の傾向を読み取ることができること、また建築家が都市環境を自身の設計における思考上の観察対象として捉える場合は、都市環境から建築あるいは建築から都市環境へといった作用関係の差異によって、建築の社会化に関する対比的な認識を読み取ることができることを示した。

以上本研究では、建築家が都市環境をいかに認識し具体的な設計に反映しているかを分析することで、建築家の社会的枠組に関する思考の一端を明らかにした。

注

- 例えば、朝日新聞 2002 年 4 月 27 日『同潤会 建て替え後も暖かさを』において、同潤会青山7パートの跡地に建つ建物を設計する建築家・安藤忠雄氏の、都市風景の中で既存の街並みの雰囲気を残した都市型複合施設を提案する内容が紹介されている。このようにマデイにおいても建物の設計者による都市環境における建築のありかたについてのさまざまな議論が掲載されており、都市生活に関わる大規模開発に関する市民の関心も高いと考えられる。
- 本論では、実際に建物を設計して、その設計論を雑誌等のマデイを通して社会に広く発表することによって建築の表現活動としている人々を特に建築家とし、その論説を研究の対象としている。
- 本論では設計論を、設計者が実際に建物を設計するときの思考過程、関心事、具体化の方法などを著したものと定義する。このなかで、都市環境に関する認識が明確に読み取れる論説を資料としている。しかしこのような意味における、著書、論文は膨大にある。したがって、すべてを把握することはできないが、ここでは、一般建築ジャーナリズムを現代の建築家のもっとも自由で活発な表現領域であるという前提のもとに、それらのなかで最も代表的と思われるもののひとつであり、しかも長期にわたって継続的に発行されている「新建築」誌を対象としている。対象とする期間は、現在の政治制度となった戦後（1945 年）から現在（2006 年）までとしている。この資料とした「新建築」誌の 1945 年から 2006 年までに目次に題名が掲載された巻頭論文の位置づけの設計論約 2150 の中から、建築家の都市環境認識を読み取ることができる 116 の論文を見いだすことができ、さらに本論で述べているような検討を行った結果 183 の都市環境認識がみられた。なお抽出したすべての都市環境認識を付録で示している。
- 志水英樹、谷口汎邦、宮本文人：大都市において銀行建築が構成する街並の物的属性について ― 街並の知覚構造に関する研究 ―、日本建築学会計画系論文集、第 375 号、pp64-74, 1987.5 など
- 船越敏、積田洋：認識法によるファードの特性に関する研究 ―ファードの研究（その 1）、日本建築学会計画系論文集、第 479 号、pp139-147, 1996.1 など
- 近藤正一、村瀬宏典、太田英和、夏目欣昇、若山滋：大正から昭和中期における建築家の建築家の言説 ―ワードのガゴライによる建築思潮の変遷、日本建築学会計画系論文集、第 578 号、pp207-212, 2004.4
- 谷川大輔、塩崎太伸、奥山信一：戦後「新建築」誌での商業建築の設計論における外形表現からみた都市認識、日本建築学会計画系論文集、第 600 号、pp57-64, 2006.2
- 本研究では、比較検討の方法として KJ 法をもとに整理・分析をおこなっている。KJ 法とは、民族地理学の分野で川喜田二郎氏によって考案されたものとしてよく知られており、何らかの問題提起から状況把握、そしてそれに対する解決方法の実施検証のプロセスまでの一連の方法を言う。ここでは、上記のなかで、ある問題をめぐって関係のありそうな情報を集め、定性的データと意味の分かれるような全体像とするまでのプロセスを狭義での KJ 法としている。川喜田二郎：KJ 法、発想法、続発想法、中央公論社、1996.3
- 本論では、建築家の言説における都市環境に関する認識の意味内容を分析した結果として得られたガゴリーに下記のようなかつこを用いて対応している。それらは主題の意味内容のまとまりが、いくつかの水準の包含関係で示されているため、本論の中で同水準のガゴリーを視覚的に明確化するためである。

『太文字』	都市環境認識のガゴリー項目	第一水準
【 】	都市環境認識のガゴリー項目	第二水準
{ }	都市環境認識のガゴリー項目	第三水準
[]	都市環境認識の特性	
《太文字》	関係手法のガゴリー項目	第一水準
< >	関係手法のガゴリー項目	第二水準

- かつこ内の数字は資料とした論文の通し番号である。ひとつの論文より複数の主題が抽出されたものはさらに添番号をつけた。
- ここの分析、および検討の内容の一部は、谷川大輔・奥山信一・加藤拓郎：建築家の都市環境認識の意味内容 現代日本の建築家の言説における都市環境認識に関する研究（1）日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）、PP567-568, 2001.9 及び、加藤拓郎・奥山信一・谷川大輔：建築家の都市環境認識に対する関係手法 現代日本の建築家の言説における都市環境認識に関する研究（2）日本建築学会大会学術講演梗概集（関東）、PP569-570, 2001.9 において一部報告している。

付録：都市環境認識の意味内容

- ※抽出例に付された番号は資料番号と一致する。関係手法も都市環境に関する認識と同時に抽出しているが、ここでは都市環境認識のみ掲載する。
- …わたくし達の現実の生活のなかには、また私的＝経済的立場と、社会的立場とが抵抗しつつ交錯しているのである。しかし、それがそれぞれに理想像として存在しているのではなく、交錯しているのが現実である。…いままで「建築」は都市計画の立場が内在しなければならぬ」とか、私的空間と社会的空間とか、私的尺度とか社会的尺度とかいうことばを使ってきたのは、漠然とではあるが、これらの意味を含んでいるのである。
 - 丹下健三「現在日本において近代建築をいかに理解するか―伝統の創造のために―」
 - …近代社会特に近代都市の特性としての traffic との問題である。…建築のもつ内部機能をより高度に発展せしめ、かつおのおのは地上にもつ社会的空間の連続性によって、その社会に位置する社会的相互関係を見出し、私たちの社会的連帯感の共感の場として、より建築的たらしめようとするものである。
大谷幸夫他「ヒロディーニ―社会的空間―」
 - …都市は CIAM が指摘したように、4 つの機能に分析することができる。住まうこと、働くこと、リクレエションと、そして交通。しかし、都市を有機体たらしめるものとして都市の core は重要であろう。…家、街、地域、都市といったコミュニティの各段階は都市を構成する一つの部分であるばかりでなく、各々のレベルは、それぞれにある程度の全体性と完結性をもつと同時に、より上のレベルに向かって開かれて、より大きい全体のシステムを組成していくものである。
 - 丹下健三「建築・都市について」
 - …1 個の建築だけでなく、もっとまわりの問題を同時にとりあげるならぬの群に対する方法をみつけないと、建築の必要条件がみだされないようになってきている。これが建築と都市との関係という、都市問題につながる新しい現実の課題のひとつとなっている。…現代建築の本質的問題を、われわれはバグミズム（新陳代謝）の理論で捉えようとしているが、…都市問題とバグミズムの問題は、現在ただちになんらかの手のうつ必要のある現代建築の直面する問題であろうと思う。
 - 菊竹清訓「現代建築をつくるために」
 - …私のいう Urbanism は、日本の農村や都市と取り組み人びとと交わりながら土着の香りをもたないものにこそ構築することであり、文明や文化の一片を構成する環境をつくるものである。
大高正人「道標への挑戦」
 - …空は灰色で街全体の印象はただ冷たく暗かった。年の暮れからデパートの整理が始まり、年が明けてカバが始まる。
宮脇檀「設計バ」
 - …ある建物が存在することがその周辺も含めた環境（都市環境）にとって単なる内部の使用価値以上のプラスがあった場合に、そこには何らかの都市性が発生しているということである。…ある種のバグミズムの持つもっとも直接的な場を与えると同時に、通り返りの人々にも何らかの関係を与えるところも重要だったといえる。
横文彦「回想としての広場考」
 - …なお、この会館の建築はバグミ街の中心になっている。それ故、都会の要衝に囲まれているわけだから…
谷口吉郎「街かどの独白」
 - …今日の第三次産業就業人口の増加傾向は、人口の多くの部分をバグミと呼ばれる空間に誘い込んでいます。昔・壮年期の男女の多くが昼間の大切な生活をバグミの中で過ごすという事実を無視して今日の建築や都市を論じことはもう不可能に近いでしょう。
林昌二「わがバグミを、なぜ」
 - …建築はその内部になにか賭けるものがある。…それは、建築の魅力を半減させる感じ方であるが、自然と都市の衰弱や経済性の暴力的な圧迫の中でやむを得ない後退であり、その後退がますます自然と都市の衰弱を招くというからくりになっている（10-1）。…他者とは何であるか。…第 1 に自然に対する了解の欠如。第 2 に集団についての了解の欠如である。このふたつと、外界のとらえ方を不明にしている（10-2）。
原広司「建築とその外野について」
 - …しかも都市にみちだけでなく、みちの両側にある建物も含んでできりとれた都市空間の一部分を、みち空間と称したいと思う。そしてさまざまなみち空間の無数の集積が都市なのである（11-1）。…とすれば矛盾をのりこえるためには、おそらく古い都市に依存した街並みの整合性、統一性とそれにからまる変化の美を追究するだけでなく、たとえば Las Vegas に象徴される街並みが暗示するものへの新しい理解だろうか（11-2）。
横文彦「みち空間と町並み」
 - …都市の必要な場所・位置に適切に建設されず、圧倒的不足が長期に渡って続き、…まさに異常事態である（12-1）。…都市住宅は遠目に見ても、全体が美しいだけでなく、1 戸 1 戸が真に美しく、生活しやすく、実質的で、しっかり落ち着いたものでなければならぬ。そういう住居が集まれば全体が美しくなる可能性は高い。…そういう個から成るほどの建造をもつ空間は、真の美しさにはなかなか到達できない（12-2）。
菊竹清訓「遠い都市住宅への道」
 - …現代資本主義社会は封建時代の村落共同体ではないのだ。かつての民衆集落の美しさは共同体内の制約或いは習慣による建て方の統一がつくり出したものといえる。…このふたつの条件を満たさない限り、今日の光景はもはや必然的というべきだ。ここにとどよる混乱があらうと現代の集落の美はこれなのである（13-1）。…未来都市の構造はきわめて抽象的な体系でなければならぬ。都市関係の無数の集まり、都市間空間の構造が未来都市の構造を決定するだろう（13-2）。…異系の時間軸の上で形成された異相の空間が、現代時点の上で多次元の直交空間を張ると、それを（共時都市）と名付ける。この共時都市は現実の都市そのものではない。…共時都市がバグミの織物という比喩で説明したように、構造化されたバグミ群でつくられてはいるとすれば、原光景は、ときには、事物と人との目くるめくような一瞬の相互介入である（13-3）。…バグミの（文学機械）の対応あるいは置換すべて成立するほどの建造をもつ空間は、この所、都市しかない。都市こそほんとうの空間機械なのだ（13-4）。
篠原一男「非合理都市と空間機械」
 - …多様な現代の都市生活では、人々は生活を働くことと休むこと、または学ぶことと遊ぶことなど、と、空間的時間的に分割できなくなっている。（14-1）。…高密度な現代の都市ではもはや建築を自立した単体としてとらえられなくなっている（14-2）。…今日、都市の…複合性は意図的に生み出されたものではなく、外的な条件として、すでに与えられている（14-3）。…また都市の建築はその全容を、ひと眼で眺めることができないものでなければならぬ。それらが単体的にとらえられ、相互の関係が排他的になりすぎている（14-4）。…自然の地形が風雨の侵食によって変化した、断崖や洞窟ができるように、人工の建築という素材で人工の自然地形である都市を、そして、そして構築したいと願っている（14-5）。
山下和正「混成の手法」
 - …装飾を捨てるとともに多くの建築は、都市の建築が必要とする、さまざまな角度、距離によってその表情がかわっていくべきである表皮のひだをも同時に放棄してしまっ
横文彦「ふたたび町並みについて」
 - …現在の日本の都市空間を環境としてとらえようとするとき、コアラの欠如にたいへん戸惑いを生じてしまう。環境に対する調和あるいは対立というものを考えるとき、そこには対象物としての環境のコアラがある場合で、既存環境に対して不信感を抱きながら調和も対立も生じてこない。
土岐新「都市の顔」
 - …日本の都市空間には、かつて自然教の信奉者であった日本人が、わずかな自然の起伏、存在などに対してもつデリケートな反応と、ものへの恐れが生きている。…自然を含めたものの作り方には、僕はあるひとつの重要な文化性を認めたいと思う。横文彦「遠くからみた『代官山集合住居計画』」
 - …変貌しながら常に新しいひとつの眺めを存在させ、記憶がその記号を繰り返し、厚みのないまま表面的で現象的であることが、都市空間なのだろうか。
長谷川逸子「都市への埋め込み作業」
 - …ところで私がこれまで求めてきた文脈はやはり現代の都市である。…それは私自身の日常的な行為を通して内部に重ねられていく都市の断片的バグミ、つまり日常的な都市生活を通じて触れる現代という時代状況との関わりとでもいったらよいであろうか（19-1）。…コアラ：私たちのバグミする都市は、個人が極めて断片的に遭遇する事象や体験を集積する事から成立している。それらは決して連続していないし、互いの脈絡もない。この脈絡ない事象や体験を重ね合わせ、ひとつの模様として織りあげているものはあくまでもある主体を介してである。すなわちバグミはコアラの手法で形成されている（19-2）。…均質：…こうした均質化が増幅されるにつれて、人々は平坦な壁の向こうに裏側の世界が広がっていることを期待しそこに想いをはせる（19-3）。…バグミ：都市にかたにおい物質の存在感は次第に消去され、視覚的要素に制限される。…ものばかりでなく人すらも、その存在としてではなく、表層の記号の要素のみが剥離して浮遊し、この記号の力によって世界が構成される（19-4）。…記号の浮遊する環境にはトリックが充満しており、それらは実体とはまったく別の世界を形成している。（19-5）。…都市には都市特有のバグミがある。バグミ街にはバグミ街の、盛り場には盛り場のバグミがある。そのバグミに乗ってはいれば体験は軽快であるが、いったんバグミからはなれると苛立ちの感情が湧いてくる。こうしたバグミは長い間いつかの都市で生活していると内面化されてしまう。（19-6）。
伊東豊雄「文脈を求めて」
 - …比較的地形に変化のあるところで、…平坦でなく、全体に緩やかな斜面で、敷地から南への眺望も開けている。交通も比較的便利な上、閑静で、まだ緑が残されているという、住環境としては好ましい条件を備えている（20-1）。…この道路に接する街区の環境を守るとして市民バグミでの住民運動も起こり、市民のこの道路に対する関心は高く、道路を公園化しようという構想も描かれている（20-2）。
清田育男「都市におけるふたつの低層の集合住居」
 - …写真はこの住宅の屋根越しに電柱や瓦屋根の民家など東京の風景がわずかに見えているものであるが、…人工的な小宇宙のごとき空間に対するバグミな都市空間との対比であり（21-1）、…そ

のこちら側からわずかに見えていた都市の風景すらも見えなくなったとき、そこにあるのは恐らくまったくの闇でしかない(21-2)。…東京という街は、均質的なルームで構成される近代建築群と、その間隙を一面に埋めている、より無秩序な自然発生的建築群との均衡の上に成り立っているということになるだろう。(21-3)。…都市の空間は、(聖) - (俗) ふたつの異なる世界が混じり合う地点に成立する空間である。…(聖) と(俗) が混じり合う空間も、その曖昧さの中に恐ろしく示し、活力を与えるのである(21-4)。 **伊東豊雄「(俗) なる世界に投影される(聖)」**

22…人工的な都市空間の中に、緑地が映えるように、美しい自然環境を、それに調和した都市的な空間がいっそう際立たせる(22-1)。…変化のある空間にさらに丸柱の「コナド」と「タケノコ」が付け加えられることにより、都市の建物と建物のあるような空間を、その中に演出している(22-2)。

谷口吉生「設計ノ」

23…比較的広い宅地は細分化され、あるいは「ツツジ」に変わり、閑静な環境が少しずつ浸食されつつある。(23-1)。…この「ツツジ」は周辺に比較的「ツツジ」が乏しい以上(23-2)、…建物の量感を表現するには通常の「ツツジ」の貼り方では紙を貼ったように見え、形がなくなってしまいうように思えた(23-3) **廣瀬豪「続環境に対するツツジ」**

24…敷地の西側を走る幹線道路の反対側には大きな銀杏並木があり、その向こう側には小学校の校庭が広がっている。将来はかなり都市的になっていくであろうこの側も、現在まだその気配はない。

小野正弘「都市・外層・場」

25…既成の都市の事実(それがどんなに安っぽい「ツツジ」な環境であるにしても)の持ついてい力を建築のなかに写し取る、あるいは何らかの対応を見いだそうとする努力なのではないか(25-1)。…「ツツジ」といい、ツツジという、凹凸という都市にはなと多くの近代建築が雑居しているのか。(25-2)。…しかしわたしたちはそのなかで、ツツジ生活であり混沌の象徴であるといわれる、この日本の都市の風景の砂漠を渡り歩きながらも、日々意識を揺るがす過程で、無限に豊かな視覚的「ツツジ」を受けとり、それを持ち帰り、知覚や感覚や感情の層に沈み編み直し直すことをやめたい(25-3)。…都市は相変わらず多くの人間によってつくり出され改変され、休むことなく構造的に手を加えられるが、私たちにとっていよいよすべての感受性の母胎、人間の感覚に栄養を送る根となり、それは「ツツジ」が敷き詰められた地層のなかにめぐるされ始めた(25-4) **富永謙「都市の事実」**

26…都市空間の分離現象は、二重の側面を持っている。その一つは、…空間を機能的に分離・純化させようとする分離現象であり、もうひとつは、…同心円的な機能的分離現象である。(26-1)。…歴史的にいうと、この地区は、それだけの街区ごとにも共通の中庭式の広場を持ち、街路網は厳格に壁面線を保つとして、17世紀から18世紀に形成された景観を原型としている。(26-2)。…第3には都市の(街区) をひとつの住宅と等価に置くことである。ツツジツツジによって秩序付けられたと考えた近代主義的空間の「ツツジ」(26-3) **黒川紀章「中間領域または曖昧性の具体化」**

27…建築は、その環境とともに、街の「ツツジ」を形成する。新たににつくれる建築もまた、その時点より、街の「ツツジ」の一部になる。 **安藤忠雄「北野町の4つの柱を通して」**

28…集合体、これは大の建物が林立する都市を「ツツジ」させるという命題はのこきと提出される。(28-1) …岩の塊や大樹や動物に人と同じ魂が宿ると思っていたころ、人々は自然を畏れ、ひたすら収穫のよきことを祈った。…当時の器の模様や土偶の形には原始的本能の表出が見える(28-2)

29…小さな普通の住宅であればこそ、ある種の全体性をもった考えが込められなければならないのである。…ほとんどは「ツツジ」に細分化され、断片化し続けているのである。

石山修武「置き忘れたきたノモチへ」

30…蔓草に絡まれ、湿気を含んだ材木は黴の臭いを放ち、廃屋はほとんど自然の中に沈みつつあった。だがそのような風景に接しても、自然の中にけ込んでいく建築を思い描いた記憶はない。…都市と連続した風景ばかりが脳裏をかすめていった。… **伊東豊雄「形影の溶融」**

31…建築は街を意識しながらも自立して、街の担う特性をその都度、新たに開いていく。街の中に人々の拠点となる場所がいっつもつくりだされていく、それらが人々の意識の底に沈み連続して、境界を取り戻す契機と成り得るだろう。 **安藤忠雄「街路の立体的拡張」**

32…超高层ビルで街区を構成しようとする新宿副都心は、ツツジの単一的な街区構成をこの一つの特徴である。…歩行者環境、あるいは歩行者の空間体験を優れたものとする試みが、都市計画に不可欠である。 **小倉善明「なぜ、吹き抜ける」**

33…毎日自然が異なる姿を投げかけるこの光庭はこの住居で繰り広げられる生活の核であり、都市で失われつつある光、風、雨といった自然の感覚を住居に引き込む装置である。

安藤忠雄「住吉の長屋から九条の町屋へ」

34…その土地固有の文化ならの根底にあるわけで、建築をつくるときには、そこの人たちにいろいろ聞いてみるのが必要じゃないかと思えますね。…表通りにいゝ蔵があればよかったんですが、裏通りに残っていて、その蔵がつくる風景がいんですね。

渡辺定夫・大高正人「地域の風景となる建築をつくる」

35…自然との関わりも大きなテーマとなった。周囲の緑が建物内部に浸透してくる。ツツジの幾何学的な形態が人為的な存在を主張している。その周りで自然は一瞬映え、その実在感を高める。

安藤忠雄「建築化された余白」

36…今朝新街を出てから、爽しい尾根を超えて、非常に美しい風変わりな盆地にはいた。ツツジ型の丘陵が半円を描いており、その山頂までツツジ形の杉の林で覆われ、北方へ向かう通行をすべて阻止しているように見えるので、ますます奇異の感を与えた。その麓に山町がある。ツツジな祭囃子の場所である。

林覚浩「個の集積から」

37…即ちこの都市は、都市が戦後になつた「ツツジ」プロジェクトとして、計画で実現させた、唯一の「ツツジ」からである。…そこから引き出されてきた「ツツジ」上の特性は、都市の戦後における他地域の巨大「ツツジ」と同様、近代主義的な概念と方法を、優等生的に過ぎると見えるほど典型的に、日本的な土壌に定着させようとするものだったと結論付け得よう(37-1)。…ここにおける都市計画が、基本的な下敷きにしたのは、おそらく、「ツツジ」以来の田園都市の流れを汲むものである。…田園的な条件の中に都市を組み立てるわけだから、実は矛盾しているのだが、どういうわけで20世紀になって生まれた都市計画の空間的イメージは、過激も保守もおしなべてこの単一の「ツツジ」にとらわれていたと言っている(37-2)。…この都市はツツジの通例として、まったくの田園に突如として都市的な装いを出現させるべく計画されたから、この土地にまつわるいっさいの記憶は抹消されている(37-3)。

磯崎新「都市、国家、そして(様式)を問う」

38…「ツツジ」の(無知と困難の藪の中にひかれた直線と直角)に示されるように、19世紀以降の都市計画を支配する、明らかに、直線的であること、健康的であること、という3つの原理が都市に巣くう疫病と同時に、暗くじめじめした路地や下道で育まれた都市の想像世界を抑圧するに至る

石山修武「虚構の実体 -ツツジ」

39…骨子は均衡のとれた人間中心の町づくりで、計画目標として「街ぐるみがついつつのツツジになること」、また「視覚的ツツジとしての意味をもつこと」などに始まり、…魅力ある都市づくりはこうすればできますよと親切丁寧指導である。 **石井孝「街のイメージ」**

40…このような形態の形成の図式に、差別的な形態決定のためのあらゆる先験的特権を行使することがなければ、その結果は、現実の形相を整える建築には中心はあり得ず、核心もありはしない。

小宮山昭「ツツジ・ツツジ・試論」

41…鋼路沖は暖流と寒流がぶつかることで、夏になると「ツツジ」がすぐ発生してほとんど太陽が照らしないもので、太古の状態がそのまま残っていて、だからぼくは鋼路を「ツツジ」でいうところ、前後も海でその中に近代都市がある…。鋼路は田舎の小さな都市市町村でなくとも、原理的には一番都市に近い都市という感じがしています。 **毛綱毅敏「魔界の建築も都市を撃つ」**

42…このことは、能楽堂が神社、寺院、あるいは武士や貴族の屋敷の中につくられたのと対照的である。この文楽劇場の歴史のもっている大衆性とそのように構造付けるかが第1のテーマであった(42-1)。…しかし、現在の国立文楽劇場の周囲の街の環境は、ツツジツツジを楽しむような盛り場とはほど遠いものである。…結果として、法的に許される最大限の「ツツジ」がそのまま建築的な形態に反映されることになった(42-2)。 **黒川紀章「歴史と現代の共生」**

43…すでに歴史が堆積され、都市の変貌が部分的にのみ進化する既存都市と違って、ツツジの異なる意味では、ひとつの実験場であり得る。都市・集落、あるいは都市・非都市という2元論が意味を失いつつある今日、多摩のようには東京の都心から離れたところであらためて都市性について考えることはそれなりに新鮮な意味を持つと思う。 **横文彦「もうひとつの都市」**

44…建築が一番自然な状態をつくるにはどうしたらいいか、つまり建築にとっての自然というテーマにいきついたような気がするわけです。…ツツジの考えたツツジツツジは、自然木があってもその上に小屋根をつくってつくわけですが、現代という時点で東京という場所を考えたときに、木で組むより軽いツツジで組んだほうが自然だ、逆に意味をはらまないと思うわけです。

伊東豊雄「現代都市のツツジ」

45…妙香院は大阪の北の中心地・梅田に近い旧町名西寺町の一角にある。歓楽街・曾根崎新地の外縁部に飲み込まれたようなこの場所は、江戸時代以来の寺院街でありながら、今日では同時に「ツツジ」街であり、飲食店街である。またツツジツツジもある。 **高口恭行「都市型寺院考」**

46…過密な商業とツツジ空間が混在しているこの閑内駅近くの場所を、室内から直接みてもあまり意味がないからである(46-1)。…横濱の閑内は異国人の慰留地としてできあがったところである。

そこに多くの橋が架けられていたということは歴史上の事実であり(46-2)、…

石井和雄「室内外の多様な関係の要求がツツジ」の多様さを生む」

47…通過交通だけのために準備された幅の広い道路と、その道路に面して建てられた小さな雑居ビル、その風景全体が日本の都市の景觀そのものだといっているような、その程度のどこにでもありそうな雑居ビルである(47-1)。…「住む」というイメージからこれほどまでにけい離れて、それでいてそれでも「住む」ための場所であり続けているこの二重性のほうが、よほど都市の風景を代表しているともいえるかもしれないのである。つまり、この二重性そのものが「都市」と呼ばれる概念の中核であると(47-2)。

山本理顕「都市という地形」

48…敷地に建っていると、井戸の前では子供達が遊んでおり、赤ちゃんと遊ぶ人の人が、子守をしながらたずんでいる。時折祠に詣でる人がある。南町から中町へと小走りに近道をして抜けていく人がある。この環境と生活の構造も、壊してはならないもののひとつであった(48-1)。…街並み特徴付けける卯建は、左官と瓦職の合作になる白眉のものである。卯建のうえに鬼瓦のある赤煉瓦小屋根が載り、軒裏は航空母艦の袖先のような白漆喰の凹面曲で美しく刻られて、水平線が強調されている(48-2)。

重村力「建築における場所と主体の回復をめざして」

49…とりわけ、都市に自然を回復することと防災上の措置を重視する、といった方針である(49-1)。…私はこの課題に取り組みながら空襲との私の体験や記憶を呼び戻している。それらは、限定された小さな体験に過ぎない。しかし一瞬の出来事であっても、生死をかけて自體を読み取り決断した経験は、私の軀に私の知覚と感覚に刻み込まれているとと思う。災害時の課題に就くなら不確かさの中で、私はとりあえず、私の軀と感性でこの課題を感じ取り判断することからはじめようと考えた(49-2)。

大谷幸夫「ツツジに託したこと」

50…これこそ傍若無人、玉石混淆、快刀乱麻(?)の都市形への召還、またといは都市の「ツツジ」なとと乱暴にも言い切ってしまう事態ではないか。(50-1) …そして都市とはそのような未決のまじりの煮えたぎる坩堝、ツツジを失った構想力につき動かされたものたちの微細なツツジによって稼働する未完の総体、未然のツツジ以外のなにものでもない(50-2)。 **高松伸「建築・機械・都市」**

51…1. 東京の将来の発展の可能性は、東京湾岸にあり、…やがて活性化してくると推測される。2. 敷地が、…将来にわたって建物の物陰になることもない、環境も南西面に関しては保全される。3. 地価が、相対的にみれば、都心部に比べて圧倒的に安く、広い土地はいろいろの面で将来に対するよりツツジツツジになる(51-1)。…敷地周囲は、第1に交通騒音によって、第2に景観的に、かなりの混乱がみられる(51-2)。

原広司「(緑日)あるいは(花祭り)としてのツツジツツジ」

52…西洋の文化のなかでは、かたちが強く自己を主張する。…それは、必然的に視覚の優劣として傾向に陥りやす。今日、ツツジツツジと称される建築の多くは、そのような西洋的な超越的視覚という病の末期症状であるように見える。

安藤忠雄「場を読む」

53…個々に美しいとか面白いというだけでなくそれが連続して生み出される町並みの変化と統一そして住んだら訪れたときに絶えず感じる活気と落ち着きといったものはまさに典型と変型、多様と統一という建築の基本課題に対する鮮やかな解答であった。 **香山壽夫「私の都市型住宅」**

54…街並み自体が前面の巨大な通過動線路上に決定的に依存していると同時に、ここに住む人々は、この巨大通過動線路とはまったく無縁に住んでいる。こうした二重性がこの風景全体の固有性であり、建築もまた、その二重性を引き受けている。

山本理顕「風景を切り取る」

55…運ばれていく川の森、運ばれて重ねられた森の現実が、(都市) である。かくして、都市とは、樹々を運び込み、川を穿た込み、山や丘や空や雲を運び込んだ結果としてその現象なのである。したがって、自然とは、分解された事物からなる、運送前がすがすがしい要素の集合であり、別の表をすれば還元された存在である。都市から返送されたもの、あるいは帰還したものである。こうした意味合いにおいて、都市は(輸送の体系) として解釈できる。

原広司「森の輸送」

56…西欧文化の価値基準であった二元論、二項対立、そして二分法に対して、ツツジは、混沌(ツツジ) と秩序宇宙(ツツジ) の共生の状態であって、混沌秩序宇宙(ツツジ) と呼ばれるものではないのである。内外と、自然と建築、技術と人間、歴史と未来、自国文化、ツツジとポストツツジ、中心と周縁、部分と全体といった二項対立あるいは二分法から建築を解き放ってツツジはツツジとしての建築空間をつくりたいというのが、今の私の悲観苦悶のツツジなのである。

黒川紀章「共生の建築」

57…東京の、例えば渋谷駅前のような、街の風景の中から「ツツジ」を抽出した。…もうひとつの考えは、ツツジの海軍主力戦闘機や月着陸船の外観の中のひとつも無造作な、時には醜い出たものの断片に注目して、その背後の恐るべき超絶技術との関係から、零度の機械という考えを抽出した。…「ツツジ」ツツジと零度の機械はひとつの空間領域の中で、重なり、交差した。都市機械という言葉が自然に浮かんできた。

篠原一男「都市機械」

58…平均化現象は近代技術文明に裏付けられ、発展していったが、その根拠を支えていたのは経済合理性である。ありとあらゆるものを効率という尺度によって判定し、部分品化していく(58-1) …下町の風景を色濃く残しているところである(58-2) **安藤忠雄「建築に(おもい)を込める」**

59…私たちは近代主義を乗り越えるものを、場所の性格付けの多様性と、差別された場所の不均一、空間のまとまり感、といったものを擬子として「まち空間」とした。商品を売るだけでなく、場の雰囲気ごと得るのだというつもりもあった。 **石井和雄「まちをつくるんだ商業建築」**

60…建物の集合が街になるための条件は何か、ということを考えると、それは少なくとも、単純に、整然と並ぶことだけではありません。生き生きとした都市であるということ、偶発性が入り込む、整然と並ぶ、ツツジな構成が入り込んだるツツジをもつ

篠原一男「明確なツツジとツツジ・ツツジ」

61…日本の風景は事物の配置の中にその特徴がありうように思われる。つまり、農村での田畑、家並、森、山々へと連なる風景は、日本的な遠近法を形成し、その土地の豊かさとった。しかし、現代社会では、それらの風景の崩壊ははなはだしく進行しており、閉じた風景は建築の基盤となるツツジとなるのが困難になってきた

相田武文「建築 -ツツジとツツジ」

62…超高层の都市や現代都市の中に、ロードツツジ集合やツツジ集合が見いだされるのだから、もはや今頃においては、「国籍を刷新して追放する」ことによって、この要素を生成することは難しくなった。

原広司「Corresponsive Architecture の条件」

63…それぞれの土地にある自然素材を組み立ててつくられた建築はそこでその生態系の一部ともいえるもので、土地の歴史や風土として時間に連続してつながっている(63-1)。…理性によって構築された他の物質の存在様式から峻別されたものとして建築を考えることから離脱し、共生すべき自然系の模相によって記述され読み取りうるものとして建築をつくるとなった。合理主義精神により切り捨てられてきた、豊かであるが半透明の情感の世界や自然が織りなすしなやかな快適な空間、さらに宇宙の不思議な調べを聞くための情感を付加して取り込むなど、新しい自然に満ち溢れた光景を展開してゆくことである(63-2)。 **長谷川逸子「(第二の自然)としての建築」**

64…敷地は北西北角の、西側公道は敷地レベルから約一層分低く傾いている。周囲は田舎のようお屋敷町で、豊かな緑に囲まれた住宅が建ち並んでいる(64-1)。…この視点から見ると都市も田園も砂漠も森林もほとんど差異がない。それらは、いずれもこの星と広大無辺な宇宙空間とを隔てる1枚の界面の上での出来事なのである(64-2) **松永安光「宇宙模型としての都市住宅」**

65…現実の東京という都市の環境の中に、たとえばこの世田谷の住宅地の環境の中に、対応するに値する、手掛かりとなる内容の構造は見いだせるのか(65-1)。…人間の住まいには、現実的な環境の構造の中で営まれているだけでなく、記憶の構造の中で営まれている。新しい住宅とは、無歴史な記憶の中で、新しい環境や形態を、むやみに生み出すことではない。…建築が文化の中で果たしてきた伝承化作用こそ、環境を人間側に引き寄せ、意味を刻みつけていく大きな母体でもあり続けたわけだ(65-2) **富永謙「住宅の文脈 -外側の環境の構造から記憶の構造へ」**

66…この数年間にこの都市空間は空虚な記号で充満してしまっ。美しく輝いていた空白の一点は今や無数の空虚な記号の集積の間に埋め尽くされている。そして空虚なツツジツツジで充填しようとするほど空虚さはいっそう増幅され、ツツジツツジは次なるツツジツツジを待望し、ツツジツツジはさらなるツツジツツジを喚起するという巧みな資本の操縦促進ツツジツツジが稼働するのである。しかし、表層のツツジツツジの蔓延 - 空虚な記号の堆積場 - ツツジツツジ待望と結ばれていく、このツツジツツジ都市空間のなかで、われわれは「ツツジ」としてひたすら空虚な記号と戯れ、建築的試みとしての記号の再生空間に励む以外術はないであろうか。それではあまりに虚しいではないか。(66-1) …私は建築の概念を開始とうとするときにツツジツツジな操作ではなく、まず新しい都市生活のツツジを発見することから始めたいと考えている。…確かにどこかでわれわれの自身の身体と精神とが遊離し、生活のツツジが失われてしまったように感じている。自然とか人間の濃い血を振り所にした生活やコミュニケーションが解体されていくことに喪失感を覚え、それを空虚と感じすぎたに違いない。(66-2)

伊東豊雄「消費の海に浸らずして新しい建築はない」

67…しかも、東京ではそれらの諸都市に比べて異常に高い土地価格をもつとも聞かず、そこには四周に塀をめぐらし、小さな庭を内側にもちた住宅が密集している(67-1)。…周辺に住宅が密集している典型的な東京の住宅地の風景をもつ(67-2)。 **早川邦彦「外側」との関係を求める」**

68…藤沢の敷地を最初に訪れたときの印象は、煙が淡々と続いている農耕風景が都市の風景に比べて豊かに見えまた。

長谷川逸子「ツツジ -ツツジツツジツツジ」

69…格別文化財的な価値のあるものではないにせよ、日本の伝統的な建築の作り方を継承し、ある一定の質を備えた町木造建築が設備の要求の高度化と、密閉した空間への要求、あるいは修理再生するより壊して建てた方が仕事として簡単にすむという理由から次々と壊され、現在のせわしない社会経済的な価値を示しているだけの無味乾燥なツツジツツジのツツジツツジに次々と建て替